

榛名山南東麓における井出村の集落移動

南 雲 栄 治

一、はしがき

本研究は近世村落の成立と発展の姿を、歴史地理学的な観点に立って考察することを意図するものである。

近世村落の成立・発展とはいっても、その前提である中世村落がどのような過程を経て、近世村落に変貌していったのかという点にも一考する必要がある。

したがって、このような点を考慮に入れながら、近世村落の具体的な考察をすすめていくことにする。

——ここに、具体的な一事例として、榛名山南東麓の「井出集落」（高崎市近郊）を研究地域にとり、井出集落の成立・発展の実態の把握に努めた。

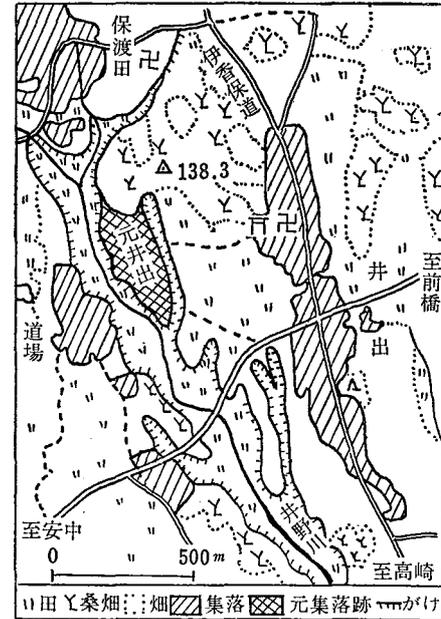
なお、本研究は昭和四十二年から四十九年にかけて調査し研究したものであり、集落の成立と発展の実態をせん明にするうえから、文献的調査と野外調査とを併用した。

二、井出集落の概況

井出集落は行政上からいえば、群馬郡群馬町大字井出（旧上郊村大字井出）で、榛名山南東麓の標高約一一五〜一三五メートルに至る緩傾斜面に発達した農業集落である。

現在も養蚕と稲作中心の農業集落で、昭和四十七年における世帯数は二三四戸、人口一〇三三人で、そのうち農家戸数は一三九戸で、水田三七町三反三畝（このうち休耕田二町一反八畝）と畑六九町五反二畝を経営している。

本地域は高崎市に隣接し、高崎市（起点高崎駅）より北へ約六キロメートル、前橋市（起点県庁）より西へ約八キロメートルの距離にある。高崎市と柏木沢を結ぶ一般県道柏木沢高崎線（旧伊香保道）が本地域を南北に貫き、また、前橋市と安中市を結ぶ一般県道前橋安中線が本地域を横断している。



第1図 研究地域

本地域の西端は浸食谷の井野川が流れて高崎市浜川町道場との境界をなしており、南は高崎市大八木町、東は群馬町三ツ寺・中泉、北は同町保渡田と接している。特に井出集落の東部においては浸食谷をなす猿府川（どん沢ともいう）、更に東には唐沢川の浸食谷が発達している。（第1図

参照)

井出集落の北部を除いて、同集落から西・東および南に向うにしたがつて、土地はわずかではあるが低下している。このように西・南は井野川、東は猿府川・唐沢川によって囲まれ、わずかながら凸面をなす緩傾斜面上に井出集落は立地している。

井出集落は矢嶋仁吉博士⁽¹⁾等によって一部紹介されており、集落の長さは約一五〇〇メートルに及ぶ長いもので、ティピカルな路村形態をなしている。

三、井出集落の成立

集落景観から考察すれば、井出集落は典型的な路村形態を示す計画的設定集落である。

それでは現在の路村形態を示す井出集落は一体いつ頃成立したのであろうか。

この現在の井出集落の成立について考察してみよう。

即ち、文化五年の古文書⁽²⁾によると、

私此段申上候当村之儀者古く今之居村ヨリ西ニ当り本屋鋪と申名所有之此所ヨリ元和年中ヨリ年々今之居村江引越寛永二年迄ニ不残引越候村ニ御座候、其後寛文四年甲辰年、安藤対馬守様御檢地御繩入御座候……

と記されていることから、井出集落は元和年間（一六一五〜二三年）より寛永二年（一六二五年）までの間（現地のおおは約一〇年間といっている）に、本屋鋪^{もとやしほ}といわれる所から残らず引越して成立した集落であることがわかる。

この本屋鋪といわれた場所は今の井出集落の西で、ほぼ南北に流れている井野川のほとりにあり、現在「元井出^{もといで}」

といわれている場所である。ここが移動する以前の古くからの井出の集落の位置であった。それ故、現在の井出集落は「元井出からの集落移動による成立である」ことが判明されるのである。特に集落の移動時期は元和年間から寛永二年までの間で、少なくとも数年間にわたるわけである。

以上のことから、路村をなす井出集落は自然発生的村落とは異なり、伊香保道いかけみちに沿って成立した計画的設定集落であることが認められる。現存する藩政期の地割図にも、ほぼ規則的な区画をなす形態が認められる。

一般に親村があつて子村が生まれた新田集落は多く見られるが、そっくり集落が移動して、かつての集落は存在しないというような井出集落の如き例は比較的少ない。

他に例を見るならば、信州街道に沿う吾妻郡の須賀尾宿34が元和四年に今の地に移転し、集落移動をしている。元は現在の位置より西方二〇町（二二二〇メートル）にあつた。

更に近くの高崎市下小鳥町5が今の位置より南東部で三國街道の東にあつたが、永祿の頃三國街道沿いに集落移動をしている。ちなみに、旧下小鳥集落の浅間さまあさまにあつた「応永十七年庚寅十月大且通」と銘のある石宮が現在の下小鳥集落の幸さきノ宮神社に移されている。

全国的立場からみると、下総国香取郡小野村6が寛文年間（一六六一〜七二年）から延宝五年（一六七七年）頃集落移動をしている。

それでは旧集落のあつた「元井出」について考察してみよう。元井出は現在の井出集落から約六〇〇メートル西にあり、井野川沿い（浸食谷の流域）の台地状の地形である。

井野川と元井出の間には井野川の氾濫原による水田が若干分布するが、元井出の西端には井野川に接している場所

がある。この水田から元井出の地面までの比高は約四メートルである。井野川の氾濫が元井出の地面まで被害を及ぼすことはない。井野川は藩政期には多く氾濫したが、今では人工堤防を築いたため殆んど氾濫はなくなった。元井出の西端には箕輪城主長野業盛の墓がある。

元井出の東側は約二五メートルの幅をもつ「嵯峨」と呼ばれている溝状の窪地があり、いつも地下水が湧き出ている所である。この湧水により、窪地は最近まで水田として利用されていた。「群馬郡村誌」によれば、古くよりこの地下水の湧出する嵯峨の地を「八坂井出」と称していた。元井出との比高は高いところで約三メートルである。

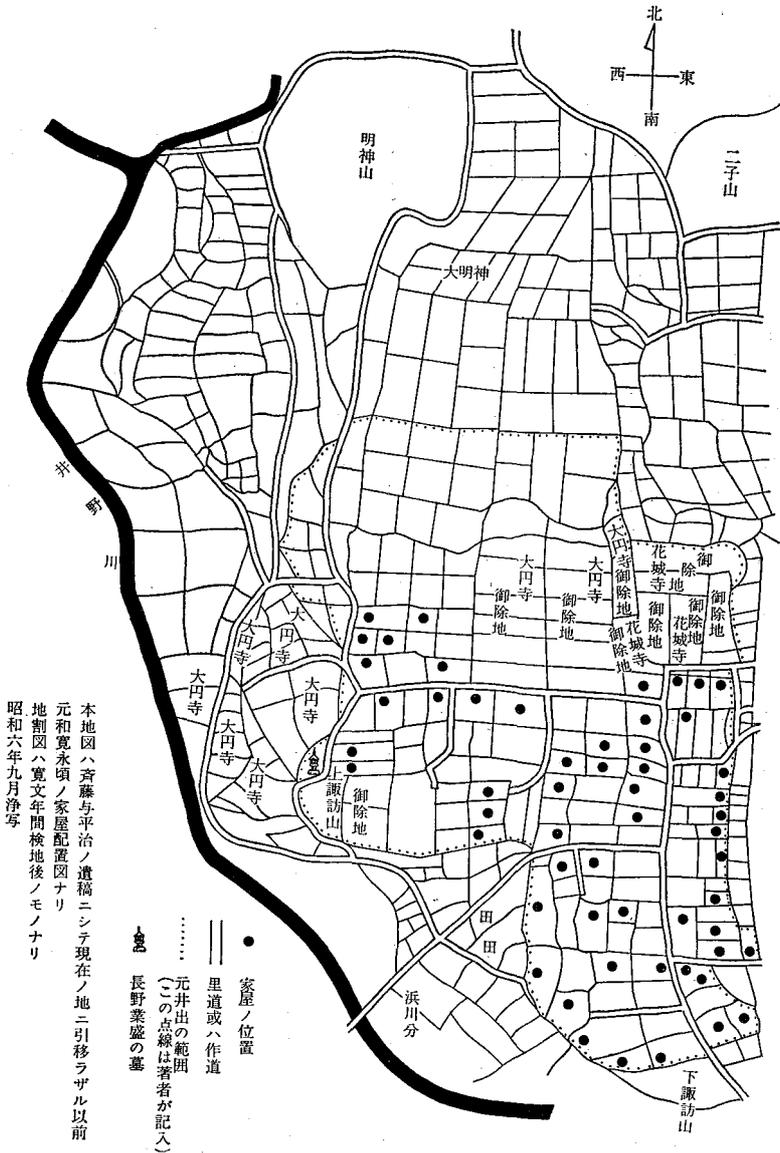
それ故、元井出は東及び西側ともに低地で囲まれ、南も井野川の氾濫原である沖積低地に囲まれ、南北に長い台地状（舌状台地）の地形で、榛名山の東南斜面の一部である。

元井出の規模は東西の長さでは長い所で約二〇〇メートル、南北の長さは約四五〇メートルである。標高は約一二三〜一三〇メートルである。それ故、集落の発展については面積が狭かったことは推察できる。

この元井出こそ近世の初期まで存在したかつての旧井出集落なのである。中世の井出の集落といえばこの元井出の集落にはかならない。

更に詳しく元井出の集落の形態と規模についてみよう。即ち、寛文検地後のものとみられる藩政期の元井出の地割図によって、集落移動（元和〜寛永二年）直前の屋敷分布をみると、第2図の如くで、集落は塊村形態である。そのため土地割もやや不規則で、各区画の面積も比較的狭い。特に屋敷の区画は細分化されており、その分布は不規則で、元井出の中部から南部に限られて密集している。道路の発達も不規則である。

この地割図によれば、集落移動直前の元和元年（一六二五年）までの屋敷は五六戸存在していた（伝承を古老に聞



本地図ハ齊藤与平治ノ遺稿ニシテ現在ノ地ニ引移ラザル以前
元和寛永頃ノ家屋配置図ナリ
地割圖ハ寛文年間検地後ノモノナリ
昭和六年九月浄写

第2図 元井出の屋敷分布図（集落移動直前）

くと、寛永二年までに三六戸が現在地に移った。その他の野村・諸星・丹波島の三姓は他地域に越した。

また、地割図の北部にかけて耕地及び大円寺・井堤大明神などの分布がみられる。

元井出は地割図に示されている点線の範囲内であるから、面積は狭かったのである。

元井出を実地調査してみると、当時の面影を留めている道路や屋敷跡が認められる。

井出の地名について考察してみると、『和名類聚抄』(8)に「群馬郡井出郷」と記されているが、この井出の郷は現在の群馬町大字井出をさすのではなく、もっと広く、かつての上郊村と箕郷町を含めたものであろうと「大日本地名辞典」(吉田東伍著)(9)には記されている。いずれにしても今の井出は、かつての井出の郷の一部であったと考えることができよう。

さらに、「井出とは、箕輪、相馬の方より降下する諸溝洫、此地に会集し、井野川と為り、堰堤自然に形成したり。(今浜川と保渡田、井出の中間の卑窪是なり)」と前掲の辞典には記されている。即ち、井出は箕輪や相馬(かつての相馬村)方面から流れてくる多くの川が集まって井野川となり、堰堤が自然にできたところで、今の浜川と保渡田・井出の中間の窪地がこの堰堤のできたところであると述べている。

たしかに二万五千分の一の地形図(第1図参照)をみても井出付近の井野川の浸食は大きく浸食崖が発達し、そのため氾濫原もあり、自然堤防が今では人工堤防に造り替えられている。

また、万葉集に、「伊香保路能夜左可能為提爾多都努自能安良波路万代母佐禰乎佐禰豆婆」(巻一四、三四一四)という東歌があるが、これは、現代文になおせば、「伊香保路の八尺の堰堤に立つ虹の頭ろまでもさ寝をさ寝ては」であるが、井出に隣接する保渡田部落の出身である万葉集研究者の土屋文明氏(10)は「ヤサカノサデ」は高い用水の堰

堤という意味で、「ヤサカ」はただ高いという意味、「サデ」は堰堤の意味で、地名ではなく、したがって和名抄の井出郷とは直接には関係はないといっている。

他の万葉集の研究者(11)(12)でも「ヤサカ」を地名とも他の意味ともはっきり断言しておらず、特に「イデ」は地名ではなく、堰堤と解釈しているのは共通しており本研究の井出とはいっていない。

吉田東伍氏も本研究の井出をこの万葉の堰堤に結びつけるのは疑いがあるといっている。

しかしながら、本地域では地下水の湧き出る「嵯峨」の地域を古くより「八坂井出(井堤)」といい、群馬県には自然村の上野田村、矢嶋村にも八坂の井出の地名がある。

以上のことから考察すれば、万葉集に歌われているイデは、本研究の井出と結びつけることは現在のところむずかしいが、本地域の井出は和名抄に出て来る井出郷の一部をなしていたと推定することはできよう。

なお、既述したように路村形態をなす現在の井出集落が古く近世以前に存在していたわけではない。近世初期までの井出集落といえはこの元井出にはかならなかつたのであり、その当時、現在の井出集落一帯を「井堤野が原」または「井堤野原」といっていたのである。その言葉が今も使われている。

四、井出集落の成立要因

現在の井出集落はどのような理由で成立したのか、即ち、元井出からの集落移動はどのような理由で行なわれたのか考察してみよう。

これについての事情を示した古文書は全く存在しないから、推察するほかはない。移動には種々の要因があげられ

るであろうが、特に居住面積のうえから考察してみると、西・東及び南に水田を控えた狭い台地上の元井出は中世まで飛躍的な発展がなかったため集落が成立していたのであるが、やがて近世に入ると人口増加にともない増加して行く農家の屋敷を確保するためには、これまでの元井出の面積の集落では不十分で、残るわずかな元井出の畑地を屋敷地に切り替えてもまだ不足の状態である。

即ち、元井出は居住に可能な面積の絶対量が不足し、元井出の村落内部の発展では面積が狭すぎ処理しきれなくなったところに移動の要因があると考えられる。

それに対して移動した井出集落の一带は、現地では古くより「井堤野が原」といっている如く、元井出から比較すれば発展性のある広い原野であり、旧集落の元井出からも約六〇〇メートル程で近いので、新しい集落を設定する条件を備えていたといえる。

また、江戸初期から全国的に新田開発が盛んに行なわれるようになったが、井出もその一つとみる事ができよう。

前述の小野村もこの元井出に似た台地状の村であるため移動の要因は元井出と類似している。

また、集落の基本条件である飲料水、特に地下水は得やすく、第1表に示される如く、井出集落の井戸の井底面深度は殆んど四〜五・五メートル程度で浅い。飲料水はこの程度の深さで一年を通して容易に確保できる。それ故、集落立地は容易であった。

さらに、移動の要因として交通の発達(1)があげられよう。即ち、近世に入ると、西上野を領し榛名火山斜面の平山城ひらやましろとして地の利を誇ってきた箕輪城もその機能を失い、ついに井伊直政は慶長三年（一五九八年）に交通の便の

第1表 井出集落の地下水調査結果

(昭和49年2月実測)

番号	場所	海 抜 高 度 (m)	地下水面深度 (m)	井 底 面 深 度 (m)	水 深 (m)
1	上 宿	134.0	3.00	4.75	1.75
2	上 宿	134.0	2.75	4.00	1.25
3	上 宿	134.0	2.85	4.75	1.90
4	上 宿	131.0	2.65	3.20	0.55
5	中 宿	126.0	3.30	4.20	0.90
6	中 宿	126.0	3.50	4.25	0.75
7	中 宿	125.5	3.35	4.90	1.55
8	下 宿	119.0	4.50	5.35	0.85
9	下 宿	118.0	4.40	5.00	0.60
10	下 宿	118.0	4.60	5.10	0.50

良い平地の和田城（今の高崎）に移り、ここに本地域にも街道の時代が到来したといえよう。

それ故、近世になると交通が整備され、物資の運搬や旅人の往来が盛んになり、街道沿いなどの交通の便の良い場所へ集落が発達するようになった。井出もその例にもれず、高崎から下小鳥―井出―原新田―柏木沢―広馬場―水沢を通過して伊香保に通ずる伊香保道⁽⁴⁾が既に古くより通じており、この伊香保道の交通（物資の運搬・旅人・名湯伊香保への湯治客など）が近世に入ると盛んになったため、この街道に沿って集落が発達するようになったと考えられる。交通の便の良い場所へ集落が成立することは生活の上からも便利で、経済的にも有利であり、今も昔も同じで当時の村落計画ともいえよう。ちなみに、文政十一年⁽¹⁵⁾には、主に兼業農家ではあるが一五人（軒）の商人が井出に存在した。「群馬郡誌」の正保年間（一六四四～四七年）の絵図には、既にこの伊香保道は重要な街道として記載され、井出も既に移動後で、この街道沿いの集落として明記

されている。

前述の須賀尾宿も、旧下小鳥村も交通の発達による移動の要因が大きくあげられる。

また、特異な要因による移動として、群馬県吾妻郡嬭恋村鎌原部落あがつま つまごい かんばらがあげられる。これは天明三年の浅間山大爆發により部落が埋没したために行なわれた災害復興のための集落移動である。かつての集落跡を「古屋敷ふるやしき」といっている。わが国にあつては一般に古代・中世・近世と集落が同じ場所にかさなって発達するような状態で存在しているのが普通であるが、井出集落をはじめ須賀尾宿・旧下小鳥村・小野村等は全体からみれば、きわめて特殊な姿であるといえよう。しかしながら、集落の発達がすべての時代を通して同一場所で行なわれる場合は却つて集落の発達の様子が曖昧になり、発達の分析が難しいのである。

井出集落は集落移動を行なったからこそ近世村落としての具体的な姿が明確に出てきたのであり、集落移動を行なわない一般的な村落の発展ではこのような明確な発展の姿は把握できないであろう。むしろ、井出集落の特殊性の中にこそ村落発展の一般的法則を見出すことができるといえよう。

五、集落規模の変遷

井出村の集落形態は集落設定の当初より路村として発達したもので、計画的設定集落としての特色をよく示している。即ち、集落の設定に際して伊香保道（「いかほみち」・「いかほけえどう」または「いかほ通り」ともいった）に沿い、その両側にほぼ短冊型に近い土地割を施し、典型的な路村が形成されたのである。元和年間より寛永二年にかけての集落設定当初からその後の集落発展状況を「藩政期の土地割図」(16)によってみると、家並みは見事な一本の

第2表 井出村の屋敷面積
(寛文4年)

屋敷面積	筆 数	%
0～1 畝	1筆	1.4
1～2	4	5.8
2～3	14	20.3
3～4	18	26.1
4～5	18	26.1
5～6	7	10.2
6～7	4	5.8
7～8	1	1.4
8～9	0	0
9～10	1	1.4
1反以上	1	1.4
合 計	69	100.0

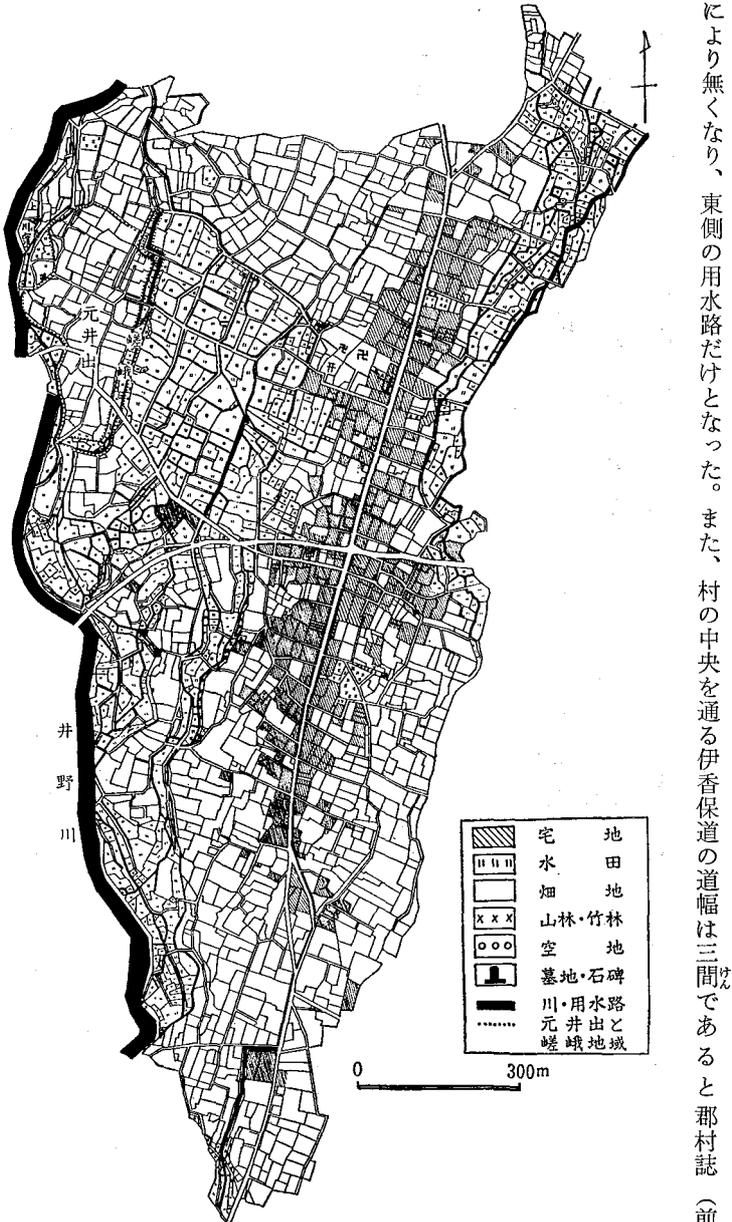
路村であるが、短冊型の宅地の各区画には既に細分化がみられる。これは集落設定後の戸数の増加による集落の発達を意味している。

具体的に寛文四年の「検地名寄帳」(17)によってその発達をみると、第2表の如くである。

即ち、一戸当り所有の宅地面積の規模は三畝から五畝の間のものが最も多く、全体の半数以上を占めている。五畝以下が全体の約八〇%も占める。更に屋敷を持たない一六戸の農家があつてこれらの屋敷を借りて生活していることを考えると、宅地は集落設定以来の形態を踏襲しつつその後、戸数の増加によって細分化され分筆されているのである。それ故、著者が群馬町土地台帳附図を基礎に昭和四十八年八月より四十九年三月にかけて実地調査により作成した第3図の現在の土地割図では更に細分化の状態が認められる。

井出の集落構成の特質はかくの如く、ほぼ短冊型に近い土地割を基礎にして典型的な路村を形成したのであるが、その後の発展で宅地の細分化がみられ、短冊型の形態はくずれている。

また、前記の藩政期の土地割図にも、現在の役場の土地割図にも、伊香保道の両側に用水路が通っている。この用水路の水は「除堰」の水を「除の小田」から引いたものと、北の中里方面から流れてくる水で、本地域が地下水の得やすい点からみると防火用水として利用されたものであろう。用水路が作られた年は不明であるが、多分、集落設定の当初であらう。道路の西側の用水路は下宿で道路を横断して東側の用水路に合していた。その横断地点には橋がか



かつていたので、そこを「橋場」と称していた。この西側の用水路は、明治になると（明治二十年代）、道路の整備により無くなり、東側の用水路だけとなった。また、村の中央を通る伊香保道の道幅は三間である」と郡村誌（前掲

第3図 井出の土地割（実地調査により著者作成）

5) に記されている。

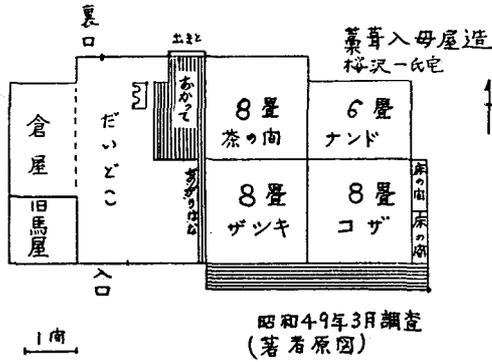
藩政期の集落規模を寛文四年の宅地の総面積でみると、二町八反二畝八歩で村の総反別の約四・六%に当たる。また、井出集落の長さをみると、年号は不明（寛文四〜寛政十一年の文がある）だが明細帳に類する「井出村古事録」(18)によれば、

一、此村地内東西ノ差渡二丁九間、南北長サ拾一丁拾間、有之村境ヨリ村境迄東西拾丁拾五間、南北へ式拾式丁御座候
一、当村之儀ハ高崎ヨリ伊香保へ道筋ニ御座候

と記されていることから、井出の集落は高崎から伊香保へ通ずる伊香保道に沿って形成され、その集落の規模は藩政期において東西の長さ（幅）が約二三二メートルで、南北の長さは約一二〇六メートルあったが、現在は北南約一五〇〇メートルに発達している。

一般に集落を構成する基本的要素は家屋である。それ故、集落景観からみた集落構成の特質をよく示すものは民家の平面形態としての間取り及び立体的形態としての屋根の形態と構造・材料等である。

そこで筆者の昭和四十二年から四十九年までの調査の中で、民家の立体的形態についてとりわけ四十二年の調査をとりあげてみると、井出の総民家数一六七軒のうち切妻が一三二軒で最も多く、入母屋三四軒、寄棟一軒である。特に屋根材料はトタン葺（最近の長尺鉄板の棧葺も含む）四三%、瓦葺三七%で、藁葺が二〇%の多くを占めている。特に藁葺の家には旧態を留めている民家が多い。藁葺は屋根を葺き替える必要があるもので、最近この上にトタンを覆っている家が多い。また、養蚕地域にふさわしく「突き出し窓」のある民家や、「出し桁造り」や、棟の上に「明りとり窓」を設けて二階を蚕室にする総二階式の家等の養蚕を考慮した民家が多い。



第4図 古くからの一般農家の間取り

昭和四十九年に再調査した間取りにおいても、第4図に示す如く藩政期の旧態をとどめる家が存在する。これは原則として田の字型で馬屋・土間などを広くとっている。

家屋の配置にも本地域の特色が出ており、母屋の南に庭があり、庭の側に納屋と倉を設けて農業集落としての特色を示している。

六、戸口の変化と生活形態

集落移動による新田集落としての特性を有して発達してきた井出村の戸口の変化を「宗門御改五人組帳」¹⁹⁾、昭和五年の「井出村戸口関係資料」²⁰⁾その他の資料によってみると、第3表の如くである。

これによると、集落移動直前の元井出の戸数は五六戸であったが、移動最後の年(寛永二年)から数えて三九年の寛文四年には元井出時代の約一・五倍、宝暦年間には約二倍に増加している。しかし、その後は幕末に至るまで戸数・人口共に停滞状態である。

明治十年には馬匹の数が多く、また、藩政期の馬匹も「井出村古事録」によると、「馬三拾一疋御座候」と記されている如く多く存在した。これは農業だけでなく、伝馬や駄賃稼業としても役立てたためであろう。

前掲書(井出村古事録)によると、

- 一、御伝馬 但シ板鼻宿へ加助郷勤石高ハ五百八石五斗二升ニ御座候



第5表 井出村の所有耕地面積の規模（寛文4年）

1戸当り土地面積	3反以下	3反～5反	5反～1町	1町～1.5町	1.5町～2町	2町～3町	3町以上	合計
戸数	21	19	32	8	4	0	1	85
%	24.7	22.4	37.6	9.4	4.7	0	1.2	100

第6表 井出村の耕地面積の変化

年号	西暦年	面積	田畑別面積
寛文4年	1664年	57町6反9畝7歩	田34町2反9畝16歩 畑23町3反9畝21歩
安永8年	1779年	98町8反7畝15歩	田31町4反0畝17歩 畑67町4反6畝28歩
明治10年	1877年	99町7反2畝19歩	田30町5反5畝19歩 畑69町1反7畝0歩
昭和47年	1972年	108町2反	田37町3反3畝 畑69町5反2畝 その他1町3反5畝

（* 田のうち休耕田は2町1反8畝。桑園は畑に含み、その他は梅林等。）

これによると、最大の面積は「下田」で、「下畑」・「中田」がこれに次いでいる。「上田」の面積は第五位で低い率を示しているが、特に「上畑」の面積は少ない。それ故、本地域の田畑の品等は低く生産力は少なかったのである。「群馬郡村誌」の中でも、井出村の地味について、「緒ニシテ軽鬆稲ニ適セス小麦粟蕎麥等ニ適ス水利不便ナリ」と記されていることから地味の低い土地であることが知られる。

更に、田畑屋敷の全面積に対する比率は、田が五六・七%、畑三八・六%、屋敷四・六%となっている。この当時は田の面積が畑より広がった。

一戸当りの耕地面積の比率をみると、第5表の如くである。一戸当り一町歩以

下の耕地を所有する家が全体の八四・七%を占め、小規模の農家が多数を占めていることが認められる。なお、一戸当りの平均耕地面積は約六反八畝である。

元井出から集落移動をしたので、一戸当りの耕地面積が増大したかのように思われるが、農家戸数の増大により、それほどには農家の耕地面積は増さなかったのである。

井出村の寛文四年以後の耕地面積の変化を、寛文四年の「検地名寄帳」(前掲17)、安永八年の「井出村御年貢可納割付之事」(2)その他の資料等によってみると、第6表の如くである。

これによって明らかな如く、安永年間には耕地の飛躍的な増大がみられる。その後はそれほど増加はみられない。

ちなみに、安永年間の一戸当りの平均耕地面積をみると、寛文四年と同様に約六反八畝で変化がない。これは農家の増大によるためである。

水田は寛文年間から現在まで殆んど増大はみられず、「井出野が原」の開拓により、畑の面積の拡大が行なわれたのである。

ここで畑の土地利用について若干考察してみると、本地域を領していた高崎藩の郡奉行であった大石久敬(一七二一〜一七九四)の著書である「地方凡例録」(22)によれば、卷之六下の一、作徳凡勘定之事の項に、

仮令バ、上州群馬郡辺、毛作の場所に小百姓、菅軒ありて、此家内を五人暮しとし、其内老幼不用のもの、式人、耕作の働等をなすもの三人としたる凡そ積りの勘定左の如し、

一、田畑反別五反五畝歩 百姓菅軒 家内五人内三人耕作働き式人老幼不用(中略)
差引金菅両菅分式朱永三拾七文八分 不足



惣溜鋪三反三畝歩余

平均壺ト坪ニ付二尺浚イ

籠ニ貳志やう鍬取壺人

此人足五人

人足ノ五千人程

と記されていることから、この溜井に土砂が堆積したため五人の人足で一坪につき二尺浚うと五千人程の人足が必要であるという願い書を出しており、灌漑用水を確保するための努力がうかがわれる。この溜井は現在も絵図と少しも変らず往時の面影をよく留めている。特に二子山古墳のすぐ北西に位置する南北に長い溜井を今も「つつみしき」と呼んでおり、当時の面影がうかがわれる。この溜井は井出村の所有であった。

そのほか、伊香保道の東の保渡田分に現在「空堤からつみ」といわれている所があるが、これも溜井であった。さらに、

- 一、堅樋 但シ 長サ一間 名所二子山 内法一尺四方 溜井尻樋一本
- 一、埋樋 但シ 長サ四間 同 所 一本
- 一、同 但シ 長サ一間 中掘ニテ水揚場 内法四寸四分 一本
- 一、同 但シ 長サ一間 同 所 内法八寸四方 一本
- 一、同 但シ 長サ一間 新田堰水割 内法六寸四方 一本
- 一、同 但シ 長サ一間 名所石橋ニテ 内法高サ一尺二寸 一本
- 一、同 但シ 長サ二間 中原ニテ 内法七寸四方 一本
- 一、掛樋 但シ 長サ二間 下同道 内法高サ五寸 花田ニテ 幅六寸 一本

と「井出村古事録」に記されている如く、「西たんぼ」の各場所に堅樋・埋樋・掛樋などを設けて灌漑化をはかった。西たんぼの灌漑用水路（西たんぼを通るこの灌漑用水路を往時は「井出村用水堰」ともいった）は現在も利用され



七 井出の集落構成の特質は「伊香保道」に沿い、ほぼ短冊型に近い土地割を基礎として典型的な路村を形成（藩政期に約一二〇メートルの長さ）したが、その後の発展で宅地の細分化がみられ、短冊型の形態はくずれている（現在は約一五〇〇メートルの長さ）。

八 集落構成要素の民家の屋根の形態及び構造・材料・間取り等に旧態を留めるものがあり、また、養蚕を考慮した家が認められる。

九 本地域の農業の生産力は低く、一戸当りの経営規模も小さかった。集落移動後、田の面積は殆んど一定であるが、畑の増大が認められる。畑の面積の拡大は、特に養蚕のための桑畑としての土地利用が中心をなしていた。それ故、繭・生糸・絹はこの地域の特産で、井出村の人口を支える要因となっていた。

一〇 集落移動してから宝暦年間まで戸口の増加は或る程度みられたが、その後は幕末に至るまで戸数・人口共に停滞状態で、飛躍的な増加がなかったのは、かかる農業経営を主とする生活形態によるためである。

一一 井出村は火山裾野のため、「祭戸堰」・「道心沢堰」・「除ヶ堰」などの小田や、堅樋・埋樋・掛樋などの灌漑設備を施して灌漑用水を取り入れ、開発された「西たんぼ」を中心に灌漑した。これらの当時の堰と村の灌漑用水路（井出村用水堰）は現在も使用されている。なお、今でも往時の溜井の跡がみられる。

付記 研究資料は、主として井出部落の斉藤惣治郎氏所蔵の古文書・絵図をはじめとする史料、群馬町役場の地図・統計等に拠った。

貴重な資料を提供して下さい、また、研究上格別のお世話を頂いた斉藤惣治郎氏をはじめ、心からなる御協力を頂いた現地の

多くの方々に對し、衷心より謝意を表するものである。本稿は、昭和四十九年一月群馬県高等学校教育研究会地理部会において研究報告した一部で、昭和五十二年五月一日の第二十回歴史地理学会（於 広島大学）において研究発表したものに修正加筆したものである。特に研究発表に際して、本学会常任委員長中田栄一氏・常任委員中島義一氏には格別の便宜をはかって頂き、浅香幸雄氏・菊地利夫氏をはじめとする諸先生からは貴重な御教示を賜わり、また、近藤義雄氏（前橋市立勝山小学校校長）・恩師矢嶋仁吉博士には平素御鞭撻を賜わり、ここに厚く御礼を申し上げる次第である。

注

- (1) 矢嶋仁吉（一九五〇） 榛名山南東麓に於ける村落居住形態の研究（地理学評論第二三卷第七号）
- (2) 齊藤惣治郎藏 乍恐以返答奉申上候（文化五年八月） 明治十年の群馬郡村誌に「前時字元井出ニ宅地アリ、天正年間今ノ地ニ移ルト云」とある如く、井出の集落移動は天正年間と記載されているが、これは誤りであることがこの古文書により判明された。
- (3) 相葉伸編（一九七一） 上州の諸街道（みやま文庫）
- (4) 坂上村誌編纂委員会（一九七一） あがつま 坂上村誌
- (5) 群馬県（一八七七） 明治十年群馬郡村誌
- (6) 木村礎・高島緑雄編（一九六九） 耕地と集落の歴史（文雅堂銀行研究社）
- (7) 齊藤惣治郎藏 元井出の屋敷分布図（元和年間の集落移動直前）
- (8) 源順 編（九三一～三七） 和名類聚抄（校訂 正宗敦夫 一九五三年 風間書房）
- (9) 吉田東伍（一九二三） 大日本地名辞典（第四卷 阪東 富山房）
- (10) 土屋文明（一九四四） 万葉集上野国歌私注（煥乎堂）
- (11) 鹿持雅澄（一九五一） 万葉集古義六（目黒書店版）
- (12) 齊藤清衛・折口信夫（一九三六） 万葉集総釈（楽浪書院）
- (13) 拙稿（一九七四） 榛名山南東麓における井出集落の歴史地理学的研究（群馬県高等学校教育研究会地理部会） 筆者は